



# ひびき



## CONTENTS

8	7	4	3	2	1
平成19年度出荷実績	200Lドラム缶市場動向推移	インド視察報告	ICDM役員会平成20年4月26日	ドラム缶工業会新役員紹介	理事長就任にあたってー中島廣久氏

## 第20代理事長 就任挨拶

# “理事長就任にあたって”

JFEコンテナ株式会社 代表取締役社長  
中島 廣久



ドラム缶工業会の新理事長に就任されました。まず抱負をお聞かせ下さい。

私はこの業界に入って1年です。ドラム缶工業会の運営にあたっては、会員の皆さんと相談しながら進めていきたいと考えています。このたび工業会の運営を少し変えました。理事長の任期を2年から3年にし、理事会と常任理事会の二本立てであった会議体系を常任理事会に一本化して簡素化を図りました。また副理事長を3名とし、200L缶、中小型缶、ペール缶のそれぞれから賀川彰 日鐵ドラム(株)社長、山本雄造(株)山本工作所社長、長尾浩志(株)長尾製缶所社長にお願いしました。

ドラム缶工業会の活動は、従前通り、標準化、国際活動、更生缶業界との連携、安全・衛生を4本の柱にしたいと思います。

現在のドラム缶業界にとっての最大の課題は、ドラム缶の素材である鋼材の確保です。鋼材価格の高騰は、この先、高止まりはあっても下がることはないでしょうし、需給もしばらくは非常にタイトな状況が続くと思われます。

鋼材の高騰と入手難に、ドラム缶工業会としてどのように対処されますか。

工業会としてできることは限られてくると思いますが、鋼材の使用量と価格高騰の影響をミニマイズするためには、ドラム缶の薄手化は避けて通れない課題と考えます。ただ更生缶業界からは、薄手缶になると更生しにくくなり、更生缶が不足してくるとの意見もあります。年間で新缶は1,580万本、更生缶は1,350万本で、全体として3,000万本近い需要があります。この需要を満たすには、新缶だけではとても不可能で、更生缶の存在も大きいのです。更生缶業界と連携して、ドラム缶のユーザーに働きかけるなど、薄手缶の普及に向けて一緒に取り組んでいきたいと思っています。

今のお話ですと、更生缶業界との連携がこれまで以上に重要となるということですね。

更生缶業界の団体である日本ドラム缶更生工業会とは常に連携を保っています。これまでも一緒に取り組んできたテーマも多く、それぞれにとって大きな成果を出しています。このドラム缶の薄手化についても、双方が意見を出し合って、良い方向に進めたいと思います。ドラム缶は板厚1.2mmのもので4回リユースできるといわれています。つまり、環境への負荷が少ない、資源や環境面からみても利用価値の高い容器といえます。鋼材価

格の高騰と入手難という問題を乗り越えて、リユースを前提としたドラム缶の需要を拓いていくためにはこれまで以上に更生缶業界との連携の重要性は増すものと考えています。両業界が一体となって動くことができるようにワーキンググループを組織することを呼びかけようと考えています。

国際活動への取り組みはいかがですか。

国際活動については、各国への視察団の派遣など、引き続き積極的に取り組んでいきます。ICDM(国際ドラム缶製造業者連合会)のメンバーとして、SSCI(米国ドラム缶工業会)やSEFA(欧州ドラム缶工業会)との交流、AOSD(アジア・オセアニア鋼製ドラム製造業者協会)での活動に取り組んでいくとともに、当工業会として派遣している各国への視察団なども積極的に進めていきたいと思っております。また、来年9月に北京で開催予定の「第2回産業容器国際会議」の成功に向けて関係組織に働きかけていきたいと考えています。

安全・衛生では、事故事例の公表が進んでいますね。

会員各社で起こった災害事例を蓄積して、それをオープンにし、情報交換することで事故に至らないようにする取り組みで、これは安全・衛生を高めるのには大いに役立つものです。さらに充実させ、当工業会内において電子媒体での情報共有を進めていきます。

最後に・・・

ドラム缶ユーザーの皆さんに理解して欲しいのは、鋼材の需給が非常に逼迫していること、その価格が高騰していることです。ユーザーとメーカーが協力して使用鋼材のリデュース、ドラム缶のリユース・リサイクルを向上させるためのシステムを構築していくことは、ユーザーにとっても製造者にとっても、また地球環境にとってもこの上なくメリットのあることだと思います。ユーザーの皆さんにもドラム缶という容器の特性をご理解いただき、我々と一体となって活動していただけたらと切に希望いたします。

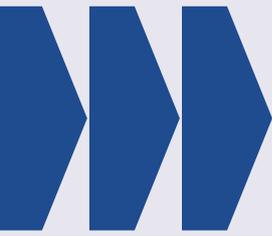


よろしくお願ひします!

## 新 役 員 紹 介

理事長		中 島 廣 久	JFEコンテナ(株)	代表取締役社長
副理事長	200L缶関係 中小型缶関係 ペール缶関係	賀 川 彰 山 本 雄 造 長 尾 浩 志	日鐵ドラム(株) (株)山本工作所 (株)長尾製缶所	代表取締役社長 代表取締役社長 代表取締役社長
常任理事		斎 藤 邦 一 田 中 秀 一 野 上 正 道 関 根 利三郎 里 卓 郎 中 村 君 子 村 上 靖 前 田 磯 友	斎藤ドラム缶工業(株) JFE協和容器(株) (株)ジャパンペール 新邦工業(株) ダイカン(株) (株)東京ドラム罐製作所 東邦シートフレーム(株) (株)前田製作所	代表取締役社長 代表取締役社長 代表取締役社長 代表取締役社長 代表取締役社長 代表取締役社長 代表取締役社長 代表取締役社長
	兼 監事			
	兼 監事			
委員長	企画・統計委員長 技術委員長 ペール委員長	倉 沢 博 丸 田 昭 憲 高 畠 秋 文	JFEコンテナ(株) 日鐵ドラム(株) (株)前田製作所	取締役 取締役 取締役

註)任期はこれまでの2年から3年に変更しました。



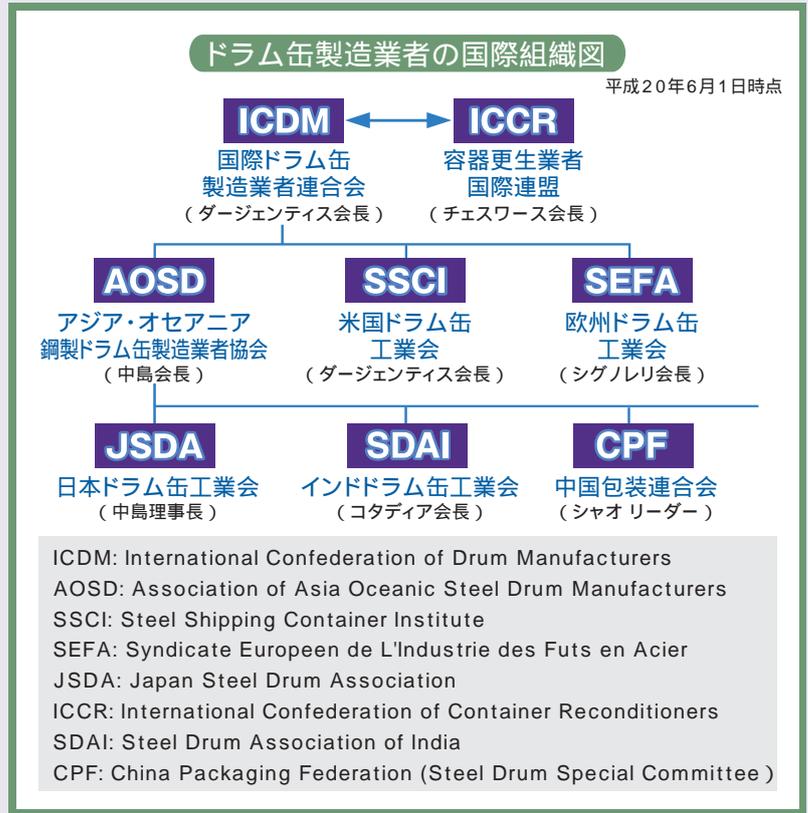
# ICDM役員会

平成20年4月26日

..... 米国 フロリダ州 マルコアイランド市にて

4月26日ドラム缶製造業者の世界組織であるICDM役員会が米国で開催され、ICDM副会長でAOSD会長でもある、日本のドラム缶工業会 当時の今井理事長が出席しました。アジア、アメリカ、ヨーロッパといった各地域での活動報告や、鋼製ドラム缶の良さをPRするキャンペーン、第2回産業容器国際会議(平成21年9月 北京にて開催予定)等が話題になりました。

当時のICDM会長であるSSCIのブルックス会長はこの会議をもって後任のダージェンティス氏に2つの会長職を引き継ぐことになりました。また、今井理事長もICDM、AOSD、ドラム缶工業会の役職を6月から中島氏に引き継ぐ予定であることを表明しました。6月1日時点の国際組織図は右のようになります。



ICDM役員会(役職名は平成20年4月26日時点でのもの)  
 左列 手前から2人目:今井ICDM副会長 右列 手前:ダージェンティス次期ICDM会長 手前から3人目:ブルックスICDM会長

mission to India

# インド視察報告

2008年2月23日～3月1日

2006年よりドラム缶工業会では、今後のドラム缶業界のより一層の発展を目指し、構成会社の未来を担う若手社員による、近年成長著しいBRICsの現状を肌で感じとるための視察団を派遣しています。企画・統計委員会事業として、第1回目の中国派遣に続き、2007年度はインドへの派遣を決定しました。右記のメンバーによって構成された視察団が2月23日より3月1日までの8泊9日(機内1泊)の日程でインドを訪問いたしました。



## 参加メンバー

団長	山本 和男	(株)山本工作所
副団長	嵯峨山哲哉	日鐵ドラム(株)
団員	清水 浩	JFEコンテナ(株)
団員	西原 和幸	JFEコンテナ(株)
団員	渡邊 琢	東邦シートフレーム(株)
団員	杉田 旨謙	(株)東京ドラム罐製作所
団員	高橋 岳友	(株)東京ドラム罐製作所
団員	塩月 佳憲	日鐵ドラム(株)
団員	米 充洋	(株)山本工作所
団員	参川 正憲	(株)山本工作所

第2回目の訪問先をインドに決定した理由は、日本と同じくAOSD(アジア・オセアニア鋼製ドラム缶製造業者協会)の加盟国であり、また、インドドラム缶工業会(Steel Drum Association of India: SDAI)が組織され効果的に運用されていること、特に2007年にマレーシアで行われたAOSD国際会議において、日本の今井理事長とインドSDAIのチェアマンであるMr. Kotadiaとの間で、今後協力し合って業界の発展を目指そうという話し合いが行われたことによります。このため、今回の訪問ではSDAIの皆様非常に歓迎していただき、様々なドラム缶製造工場を見学することができました。

また、ドラム缶ユーザーである「DIC India Limited社」と「Bharat Shell Limited社」も日鐵ドラム(株)殿とSDAI殿のご紹介により訪問することができました。このため今回の視察では製造者、使用者の両面からドラム缶及び液体物の輸送についての様々な意見を聞くことができ、非常に有意義な視察となりました。また、三井物産インド支社殿には会社訪問の際の通訳の帯同と、全般的なインド経済のレクチャーをしていただきました。

こうして様々な方々からご支援、ご協力をいただき、無事に視察を終えることができました。

## 2月25日(月)【コルカタにて】

午前は「DIC India Limited社」を訪問。約束に15分ほど遅れての到着でしたが歓迎していただきました。「DIC India Limited社」は1947年に創設され、1999年12月にDICグループへ。インドではほかにムンバイ、アーメダバード、ノイダ、チェンナイ、バンガロールに工場がありますが、インド本部はここコルカタで、生産品目はリキッドインキ、新聞用インキなどです。

午後は「Balmer Lawrie & Co.Ltd.社」を訪問。インド政府系の会社で、容器事業のほかに潤滑油、建設、物流、紅茶、旅行代理店等の事業を行っています。容器事業はコルカタ、チェンナイ、ムンバイ、シルバッサの4工場があり、この工場はISO9001を取得しています。輸送距離は平均25km。見学後、「Balmer Lawrie & Co.Ltd.社」のコルカタ市内にあるゲストハウスで、夕食に招待していただきました。

## 2月26日(火)【午前コルカタ、午後ムンバイへ移動】

午前は「Bharat Barrel & Drum Mfg. Co. Ltd.社」を訪問。3工場を所有していて、見学したコルカタの工場は55年間稼働しています。生産品目は2品目で、18ゲージ(1.25mm、M級)が2割、残り8割は20ゲージ(1.0mm、L級)を生産しています。倉庫には6,000~7,000本の保管が可能です。

午後にムンバイへ移動。アンバサダーホテル宿泊。

## 2月27日(水) 【ムンバイにて】

午前にインド三井物産ムンバイ支店へ。インド三井物産鉄鋼製品部井上勝博シニアコーディネーターが合流。井上氏よりインド全体の経済の動向や、文化についてのレクチャーを受けました。

インドは、人口11億人、人口・面積ともに日本の約8.8倍で日本と人口密度がほぼ同じ。また、25歳未満が54%を占め、2035年までに世界一の人口大国となる。

成長計画は年間平均9%を目標に設定し、従事者60%を占める農業の回復及び貧困削減を目標としている。

主要産業の動向は、IT・薬・映画産業の成長が顕著で、鉱工業よりもサービス業が先に発展している世界でも珍しい国である。

乗用車国内販売台数は、2006年138万台が2015年には350万台へ増加することが予測されており、携帯電話の普及率も、毎月600万人増加し、既に10%を超えている。



Dimple社 中央右:Kotadia社長 中央左:山本団長



Dimple社 工場内

インドへの企業進出は、自動車、自動車部品会社の進出が多く、日系企業は438社。昨年の362社からさらに増加している。

インドには、リライアンス、タタ、ビルラなど、大小40余りの財閥・同族企業グループがあり製鉄、自動車、IT、サービス業と主な産業発展の中心となっている。

インドは、道路などの未整備及び資源不足の問題はあるが、ゆっくりと大国へと成長すると予測されていた。

午後は「Dimple Drums & barrels Pvt. Limited社」を訪問。立地はムンバイ都心より車で2時間ほど離れたマハシュトラ山の麓にある工業団地の中にあります。Dimple社のドラム生産工場はこの工場のみです。他に旅行代理店や、レストラン経営などを行っています。使用鋼材は他社と同じ18ゲージ(1.25mm)と20ゲージ(1.0mm)。SAIL(Steel Authority of India Limited社)から大部分の鋼材を買っています。プラグ、フランジはトライシャ製品を使用しています。ドラムの納入先はムンバイ近辺のみならず、インド各地にわたっており、例えば南東のチェンナイにも納入先があります。

工場見学後、ゲストハウスの中庭にてウェルカムパーティーを開いていただきました。この日のためにイベントクリエーターを起用してプランを立て、様々な料理を用意して大歓迎をしていただきました。

2月28日(木) 【ムンバイにて】

午前は「Bharat Shell Limited社」を訪問。「Dimple Drum & Barrel社」の近くの立地です。ドラム缶の購入先は、近くのドラム製造企業2社で、1.25mm厚のヨーロッパスタイルを使用しています。200Lのみ鉄ドラムで、小型はペールも含めてプラスチックです。再生缶の使用はなく、使用済みの缶は他社に販売しています。インド国内にはムンバイの工場しかなく、ここからインド国内すべてに配送しているとのこと。

見学後、この後訪れる予定の「Pearson Drums & Barrels Pvt. Ltd.社」のMr. Sahaと合流しましたが、工場が電気関係のトラブルで稼動していないとのこと、復旧が間に合わず見学できないと、申し訳なさそうに謝っていただきました。ムンバイへの帰途のホテルで昼食をご馳走になり、夕刻からのSDAIのプレゼンテーション(発表)には参加するのと、一旦別れました。

午後6時よりSDAIとのミーティングを、宿泊しているアンバサダーホテルのボールルームで開始。SDAIのSaha副会長(Pearson社)により、パワーポイントでインドのドラム缶に纏わる様々な説明を受けました。

現在インドでは200L鉄ドラムは1,300万本/年の供給能



Dimple社 生産品目

力がありますが、需要は600~700万本/年程度です。供給過剰で過当競争のため、材料である鋼材の価格は上がっていますがそれを製品単価に転嫁できずに苦慮しています。製造は2交代で行っている所が多いそうです。マーケットとしては大きく見てムンバイ、デリーを含む西部が66%と大半を占め、次にコルカタを含む東部が20%、そして南部が10%、北部が4%とのこと。また板厚は1.0mm(L)缶がおよそ70%、1.25mm(M)缶が25%、アスファルト用の0.6mmが5%とのこと。



Bharat Shell Limited社 混合・充填工場訪問



SDAIのプレゼンテーション(発表) 左から2人目がSaha氏

視察総括

今回の視察で、今現在大変なスピードで経済成長を遂げている国へ行き、そこで働く人々とふれあえたことは、日本で高度成長期を体感していない我々にとりましては、非常に有意義な経験となりました。

今回の視察に関していろいろとご支援、ご協力をいただきました皆様へ心より感謝申し上げます。



SDAIのプレゼンテーション(発表) 中央:Kotadia会長 その左:Saha氏

200ドラム缶市場動向推移(昭和38年度~平成19年度)

(単位:千本)

年度	昭和38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52
新缶	2,425	2,924	2,862	4,029	5,343	5,924	7,548	8,475	8,645	9,353	10,607	8,345	7,644	8,113	8,603
更生缶	20,464	22,763	25,936	26,510	27,852	29,125	30,363	30,105	27,749	26,666	23,520	16,830	14,786	15,444	14,949
合計	22,889	25,687	28,798	30,539	33,195	35,049	37,911	38,580	36,394	36,019	34,127	25,175	22,430	23,557	23,552

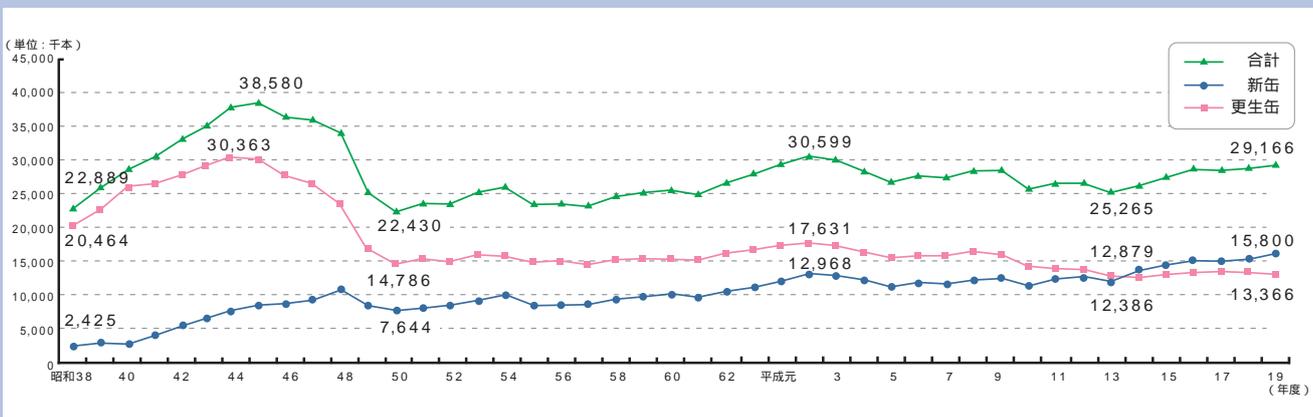
  

年度	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	平成元	2	3	4
新缶	9,148	10,149	8,613	8,518	8,710	9,436	9,810	10,070	9,674	10,523	11,212	11,993	12,968	12,822	12,156
更生缶	16,018	15,867	14,880	15,010	14,528	15,230	15,466	15,447	15,241	16,139	16,769	17,424	17,631	17,316	16,300
合計	25,166	26,016	23,493	23,528	23,238	24,666	25,276	25,517	24,915	26,662	27,981	29,417	30,599	30,138	28,456

年度	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
新缶	11,189	11,814	11,636	12,142	12,454	11,380	12,419	12,849	12,386	13,590	14,502	15,186	14,952	15,393	15,800
更生缶	15,549	15,905	15,905	16,367	15,941	14,344	14,084	13,847	12,879	12,602	12,981	13,491	13,658	13,675	13,366
合計	26,738	27,719	27,541	28,509	28,395	25,724	26,503	26,696	25,265	26,192	27,483	28,677	28,610	29,068	29,166

(注)1. 千本以下四捨五入。 2. 昭和38年度の生産本数不明につき、生産トン数67,002トンを40年暦年平均単重27.63kgで算出した。



# 平成19年度 出荷実績

平成19年度の200L缶の出荷は、前年度に比べ2.6%増、407千本増の15,800千本と過去最高の昨年度を上回りました。これは主用途先の化学向け(前年度比1.4%増、407千本増)が堅調に推移し、石油向けが(同16.7%増、331千本増)と伸びたことが主因です。

ペール缶は、主用途の石油向け(同1.2%増 129千本増)、化学向け(同1.3%増 122千本)が好調のため、前年度を0.6%、129千本上回り、22,513千本となりました。中小型缶も、前年度比0.5%増の927千本と、ほぼ前年度並みとなりました。

## 平成19年度 缶種別・用途別 出荷実績

缶種	平成19年度実績							トン数
	本数 (千本)	前年度比 (%)	用途別(本数×千本)					
			石油	化学	塗料	食料品	その他	
200L缶	15,800	102.6	(116.7) 2,310	(101.4) 12,281	(85.6) 769	(114.8) 222	(101.2) 218	370,050
ペール缶	22,513	100.6	(101.2) 11,268	(101.3) 9,725	(88.7) 848		(98.0) 672	36,915
中小型缶	927	100.5	13	823	25		66	6,148
亜鉛鉄板缶	461	98.2		315	3	12	131	3,103
ステンレス缶	39	97.6		26	3	2	8	977
合計	39,740	101.4	13,591	23,170	1,648	236	1,095	417,193
前年度比(%)	101.4	-	112.7	101.4	85.9	116.1	95.2	102.3
構成比(%)	-	-	17.2	74.7	4.8	1.3	2.0	100.0

(注) 1.用途別200L、ペール缶の上段( )は前年度比。 2. 前年度比、構成比はトン数ベース。  
3.亜鉛鉄板缶、ステンレス缶は、200Lドラムおよび中小型缶を含んでいます。

本数(単位:千本)

缶種	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度
200L缶	11,380	12,419	12,849	12,386	13,590	14,502	15,186	14,952	15,392
ペール缶	24,079	24,928	24,775	22,952	23,049	22,898	22,630	22,642	22,384
中小型缶	1,042	1,134	1,113	981	1,053	1,042	1,119	967	922
亜鉛鉄板缶	337	320	315	307	312	329	413	451	470
ステンレス缶	29	32	38	22	30	42	46	39	40
合計	38,867	38,833	39,090	36,648	38,034	38,813	39,394	39,051	39,208

## 会 員

### 《正会員》

斎藤ドラム缶工業(株)  
山陽ドラム缶工業(株)  
JFE協和容器(株)  
JFEコンテナ(株)  
(株)ジャパンペール  
新邦工業(株)  
ダイカン(株)  
(株)東京ドラム罐製作所

東邦シートフレーム(株)  
(株)長尾製缶所  
日鐵ドラム(株)  
(株)前田製作所  
(株)山本工作所

### 《準会員》

森島金属工業(株)

### 《賛助会員》

エノモト工業(株)  
(株)大和鐵工所  
三喜プレス工業(株)  
(株)城内製作所  
東邦工板(株)  
(株)水上工作所

## ドラム缶工業会

〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-2-10  
(鉄鋼会館6階)  
TEL 03-3669-5141 FAX 03-3669-2969  
e-mail : drum.pail@jsda.gr.jp

URL: <http://www.jsda.gr.jp>

ひびき No.54(平成20年7月18日発行)  
発行人 ドラム缶工業会  
事務局長 米倉 隆行